戦姫絶唱シンフォギアマッハジード

ルオン

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

１人の青年、朝倉剛は、女神アリアにより２人の戦士、仮面ライダーマッハこと詩島剛、ウルトラマンジードこと朝倉リクの２人の戦士へ、魂を２つに別けて転生した。

各世界で、力を使い果たし、死んでしまった２人は、特殊な空間で女神アリアと再会し、朝倉剛へと戻る。

そして朝倉剛は、女神エリスの提案にのり、歌姫たちが戦う世界へと転生する。

これは、２人の戦士に転生していた戦士が歌姫たちと仲間と共に、世界を守る物語である

※この作品は『戦姫絶唱シンフォギアマッハ～戦う歌姫たちとマッハな戦士～』のリメイク版となります。

※多重クロスのキャラについては、１人だけになっております。

※４月１４日に、リメイク版プロローグを更新

目　次

プロローグ：終わりと始まり ―――― 1
Ｓｉｇｎａｌｌ：ライブと戦い ―――― 9

プロローグ：終わりと始まり

とあるビルの地下駐車場にて、白い仮面の戦士と金色の仮面の戦士が戦っていた。

戦いが激しくなるに連れ、白い仮面の戦士――仮面ライダーマッハこと詩島（しじま）　剛（ごう）の体が鈍くなっていき、金色の仮面の戦士――――ゴルドドライブこと蛮野（ばんの）　天十郎（てんじゅうろう）。

「技もまともに撃てない体で、私に挑むとは、まさに愚か者だ」

「なんだと……!!グワッ!!」

掴みかかろうとした剛であったが、敵であり父親である蛮野に蹴り飛ばされる。

「お前は私の恥だ!!醜く死ぬがいい!!」

「がはっ……（ごめん……姉ちゃん）」

「剛!?」

蛮野が剛を攻撃する瞬間、剛の変身が解ける前に戦っていた機械生命体ロイミュードの一体で、仮面ライダーチェイサーとして戦っていたチェイスが、魔進チェイサーへ変身し、剛の盾になるように剛と蛮野の間に入る。

「グッ!?ガァっ!?」

「チェイス!?」

「砕けろ!!」

「ぐぁあああ!?」

「死ね!!」

「グッ!!」

蛮野の攻撃を受けすぎたせいで限界を超えたチェイスは、変身が解けてしまい、仰向けに倒れこむ。

剛は体をお越し、倒れてくるチェイスを受けとめた。

「おい!!……嘘だろ……なにやってんだよ!?」

「……これでいいんだ……剛。霧子が愛する者たちを守れるなら……本望だ」

「……人間が俺にくれた……宝物だ。……俺とお前はダチではないが

……持っていてくれ……燃えてしまうと……勿体ない」
「……」
「……ふん‼」
「うわっ‼」
　自分の宝物だと言って、変身に使う【シグナルチェイサー】と免許証を剛に預けたチェイスは、剛を押し退け、蛮野に向かって駆け出し、蛮野の腰に抱きついた。
「くっ!?このっ!!離せ‼」
「うぉおおお‼」
　―ドガァァァァァァン―
「チェイスゥウウウ‼」
　チェイスは最後の力で、蛮野を巻き込んで自爆し、ロイミュードの心臓となる【コア】が煙の中から出てきて、砕け散った。
　それを見た剛は瞳から涙を流し、シグナルチェイサーと免許証を握りしめる。
「ふざけんな……こんな死に方迷惑だろ……バカヤロウ……誰もこんなこと望んじゃいねぇよ‼」
「フハハハッ‼」
「お前‼」
　死んだと思った蛮野が、煙の中から出てきて凝視する剛。
　そんな剛を嘲笑いながら、蛮野が話しかけた。
「理解したろ、剛？プロトゼロは無駄死にした。愚か者がすることは全て、無意味なのだ」
「……だったら、テメェの存在も無意味だな。」
「ああん？」
「人間じゃねぇ奴が……こんなに優しいのによ‼」
〈シグナルバイク‼〉
「Ｌｅｔ，ｓ変身‼」
〈ライダー‼マッハ‼〉
　剛はそう言いながら立ちあがり、自分の変身アイテムである【シグナルマッハ】を取り出し、腰に装着した【マッハドライバー炎】に挿

入し、再び仮面ライダーマッハへと変身した剛。
剛は武器である【ゼンリンシューター】を取り出し、エネルギー弾を放ちながら蛮野へと近づいていき、蛮野へと掴みかかる。
「腐りきったお前の心こそ、一番愚かだ‼」
「記憶力のない奴だ。そもそもお前の体の不調が、プロトゼロを殺したのだと、もう忘れたのか‼」
「黙れぇぇぇぇ‼あああ‼」
「最後だ……剛‼」
「うわぁああ」
蛮野の攻撃で、仰向けに倒れてしまう剛。
倒れた剛は瞳を閉じ、今までのチェイスに対する態度に、深い後悔をしていた。
「(バカヤロウは俺だ……意地ばっかはって、失うまで気づかねぇで)」
目を開き、立ち上がる剛。
「待てよ……」
「剛⁉バカな‼もはや力のかけらすら残ってないはず⁉」
「寝ぼけたこと言うな……俺の全身から溢れ出す、
怒りの炎が見えねぇのか⁉」
剛はそう言いながら、チェイスから受け取ったシグナルチェイサーを取り出す。
「テメェは、いくつも許せねぇ事をした。俺の心を利用し、姉ちゃんを侮辱し、クリムの発明を悪用し続けた。だがな、今一番許せねぇのは……俺の……俺のダチの命を奪ったことだぁ‼」
「行くぜチェイス‼一緒に戦ってくれ‼」
〈シグナルバイク‼ライダー‼チェイサー‼〉
「はぁあああ‼」
剛がドライバーにシグナルチェイサーを装填すると、マッハの下半身のアーマーに、チェイサーのアーマーが装着され、剛は【仮面ライダーチェイサーマッハ】へと変身した。
それを見たゴルドドライブは、驚きを隠せなかった。

「なんだこのマッハは⁉こんな形状……ありえない‼」
《ズーット、チェイサー‼》
「はぁあああ‼」
「グアッ‼」
　高速移動での攻撃で、蛮野にダメージを与えて追い込んでいく剛。
「こいつで……終いだ!!」
〈ヒッサツ!!フルスロットル!!チェイサー!!〉
「はぁぁぁ……デヤァァァァ!!」
「がぁあああああ⁉」
　剛の必殺技のキックで蛮野は蹴り飛ばされ、耐えきれないダメージにより爆発した。
　対して剛は限界を超えてしまい、変身が解けてしまう。
　今にでも倒れそうな剛だが、踏みとどまり、チェイスが使っていた【シンゴウアックス】を拾い上げ、ゴルドドライブが爆発した時に離れた、ベルト――蛮野の本体へと歩いて行く。
「くっ‼まさか剛がここまでやるとは⁉仕方がない……今のうちにシグマに私の意識を」
「させるかよ」
「ッ⁉剛⁉」
「……」
〈ヒッサツ‼マッテローヨ‼〉
　剛は無言のままシンゴウアックスに、シグナルチェイサーを装填する。
　その行動に、蛮野は命の危険を感じる。
「ま、待て剛⁉私のような頭脳を失えば、世界は――⁉」
〈イッテイーヨ‼〉
「いって……いいってさ」
「や、やめろ‼剛‼」
　蛮野の言葉を無視して、剛はシンゴウアックスを振り下ろして蛮野を破壊した。
　蛮野を破壊した剛は、その場へ倒れこむ。

「はぁ……はぁ……終わったぜ……チェイス」
「剛!!」
仰向けに倒れた剛の元に、剛の姉である詩島（しじま）霧子（きりこ）が駆け寄って、剛を抱き上げる。
「剛!!」
「……姉ちゃん」
「倒したのね……ゴルドドライブを」
「ああ……でも……チェイスが……死んじまった」
「チェイスが!?」
「ごめん……姉ちゃん……」
「剛？」
「俺も……限界みたい……」
「えっ？」
「姉ちゃん……進兄さんと……幸せに……なって……くれ……よ……」
「剛!!」
「……あり……がとう……」
「剛？……剛!!」
「……」
「剛……ごぉおおおう!!」
姉である霧子に看取られながら、仮面ライダーマッハ、詩島剛の物語は幕を閉じた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

とある世界では、人類を守るために戦った巨人の1人である【ウルトラマンジード】こと朝倉リクは、ボロボロの状態で、仰向けに倒れていた。
そのリクに、仲間である鳥羽ライハとペガ、愛崎モアに伊賀栗レイトが駆け寄る。
「「「リク（くん）!?」」」

「ハァ……ハァ……皆……ごめん……もう限界だ……」
苦しみながら、言うリク。
するとリクの体が、光の粒子となって消えはじめた。
「リク……リク!!」
「しっかりしてリク!!」
「お願いリクくん!!消えないで!!」
「リクくん!?」
「ハァ……ハァ……みんな……すまない……どうか……幸せに……」
そう言ったリクは、完全に光の粒子となって消え、この世を去り、世界から1人の戦士が消えてしまった。
こうして、朝倉リクことウルトラマンジードの物語は幕を閉じた。

だが、2人の戦士の物語は、新たな物語となって再び動きだそうとしていた。
とある空間
そこには、力つき、死んでしまった剛とリクがいた。
「な、なんだここ?」
「俺、さっきまでボロボロだったのに」
何故自分がこんなところにいるのか分からず、戸惑い混乱してしまう剛とリク。
その時
「目覚めたのですね」
「えっ?」
剛とリク以外の声が響き渡る。
2人が振り返ると、そこには1人の女性がいた。
「「誰?」」
「やはり……覚えていないのですね」
悲しそうな顔をしながら言う女性。

すると、女性は2人に手を向けた。
「今から、お2人の魂を1つに戻します」
「はっ？何を言って――――ぐっ⁉」
「な、なんだ⁉」
突然苦しみ出す剛とリク。
すると、突然2人の体が光だし、2つの光の球へと変わる。
そして2つの光の球は、引かれ合うようにくっつくと1つの光の球となり、1人の青年の姿へとなった。
「ここは？」
「目を覚ましましたね♪朝倉剛さん♪」
「えっ？あ、アリア様⁉」
青年――――朝倉（あさくら）剛（ごう）は、女性――アリアを見て驚いた。
「どうやら、魂を2つに別けた状態で転生させた影響で、記憶を失ってしまったようですね」
「そ、そうなのか？」
「はい♪とりあえず一言……まったく‼あなたはいい加減、その無理するクセを直してください‼」
「わ、悪かったってアリア様‼」
生と死の狭間と呼ばれる、あの世とこの世の間にある空間で、剛は世界を管理する神の1人であるアリアに叱られていた。
理由は、剛の正体は転生者であり、何度も無理な戦いをして死んできたからである。
今回も、無理して戦い、死んでしまったために怒られているのだ。
「ホントに分かったんですか？」
「だ、大丈夫だって。分かったから」
「……まぁいいでしょう。次の世界ですが、どこか希望はありますか？」
「ん～……無しってできない？」
「えっ？ど、どうしたんですか急に⁉」
「いや……俺結局、誰も守れないからさ。大事なダチを……くだらない意地でダチと認めないで、俺のせいで死なせちまったからさ」

「剛さん……」
「だから、転生は無しってこと「気にするな」えっ？」
「別の女神が言っていたんです。先程チェイスさんが「気にするな、お前はちゃんと応えてくれた。だから・・・・生きてくれ」と、言っていたそうです」
「チェイスが⁉」
「きっと剛さんが今みたいな事を言うだろうから、もし死んでここに来て、言ったらそう言ってくれと、頼んでいたみたいです」
「チェイス……」
アリアからチェイスの言伝てを聞いて、涙を流す剛。
その剛に、アリアは再び問いかける。
「剛さん……どうしますか？」
「転生……頼む」
「分かりました♪ちょっと待っててください♪」
剛の返事を聞いて笑顔になったアリアは、目の前に画面のような物を出現させ、それを操作するアリア。
操作していくアリアは、ある画面を見て操作する手を止めた。
「……剛さん、1つ見つけたのですが。この世界にしますか？」
「どんな世界？」
「人類共通の脅威とされる存在、【ノイズ】と呼ばれるものたちから、【シンフォギア】と呼ばれる物を纏って少女たちが戦う世界です」
「……そんじゃ、その世界で頼むよ」
「分かりました。では転生を開始します。剛さん、今度こそ無理しないでくださいね」
「あいよ」
剛が返事をすると、剛の体が光だしその場から消えた。
「剛さん……お願いですから……無理はしないでください」
アリアは剛がいた所を見続け、剛が無理をしないことを祈る。
この時より、詩島　剛と朝倉　リク、2人の戦士に転生して戦った朝倉　剛の、本人として物語が動き出したのであった。

Ｓｉｇｎａｌｌ：ライブと戦い

とあるライブ会場

ここで今、ある計画と同時進行で、この世界のツインボーカルユニット、【ツヴァイウィング】のライブ準備をしていた。

「スゥ……ハァ～……」

「緊張してるのか翼？」

「奏……」

ライブステージの裏で、緊張を解すため、深呼吸するツヴァイウィングの１人である、風鳴（かざなり）翼（つばさ）と、その翼に声をかけるツヴァイウィングの１人である、天羽（あもう）奏（かなで）。

この２人には、歌手としての顔以外に、もう１つの顔があった。

人類共通の特異災害【ノイズ】

ノイズには、通常兵器での攻撃は通用せず、ノイズに触れられた人は、炭素化して死亡してしまう。

そのノイズに唯一対抗できるのが、【聖遺物】と呼ばれる欠片から作り出された【シンフォギア】と呼ばれる物である。

そのシンフォギアの１つ、【天羽々斬】の【装者】と呼ばれるのが翼である。

そして奏も、シンフォギアの１つである【ガングニール】の装者である。

今回のライブは、観客に歌を聞かせるのと同時に、装者の２人が歌うことで発生する【フォニックゲイン】で、新たに発見された完全聖遺物【ネフシュタンの鎧】を覚醒させるためである。

「奏は、緊張しないの？」

「するさ。でも、それ以上に、こんなおっきなステージで歌える嬉しさが大きくて、緊張なんて吹っ飛んだよ‼」

「そっか♪」

「それに今日は、〝あいつ〟も見に来るんだ。緊張して、失敗なんてできないよ‼」

「そ、そうよね／／／／／／」

「だから翼、あいつにいいとこ見せるためにも、楽しくやろうぜ♪」
「……うん‼私も、〝彼〟に誇ってもらえるよう、頑張るわ‼」
「いい顔だな、2人とも‼」
「叔父様……⁉」
「ダンナ」
　奏と翼が話している所へ、彼女たちが使用するシンフォギアや聖遺物の管理、及び対ノイズ対策部署である【特異災害対策機動部二課】の司令官で、翼の伯父である風鳴（かざなり）　弦十郎（げんじゅうろう）がやって来た。
「2人とも、今日は頼んだぞ‼」
「任せておきなダンナ‼あたしらの歌で、会場を盛り上げてやるよ‼」
「そして、私たちのフォニックゲインで、ネフシュタンの鎧を覚醒させてみせます」
「期待してるぞ2人とも‼」
　そう言った弦十郎はその場を後にし、奏と翼はライブの準備に取りかかった。

　その頃、ツヴァイウイングのライブ会場の外で並ぶ人々の列の中で、1人の女の子が暗い顔をしていた。
「はぁ～……私、あまりこのユニット、あまり知らないだよな～」
　彼女の名は立花（たちばな）　響（ひびき）、どこにでもいる中学生である。
　本来彼女は、友人である小日向（こひなた）　未来（みく）に誘われ、ツヴァイウイングのライブに来たのだが、小日向未来に急な用事ができて来れなくなってしまった為、暗くなっていたのだ。
　そんな時だった
「どうかしたのか？」
「えっ？」
　後ろから、1人の人物が響に話しかけた。
　話しかけられた響は後ろを振り返り、話しかけてきた人物を見て驚

いた。
「ご、剛さん⁉」
「よっ‼響ちゃん」
響に話しかけたのは、仮面ライダーマッハ、ウルトラマンジードとして戦い抜き、新たな命を持って転生した、朝倉　剛であった。
そして響は、剛の後ろに3人いる事に気づき、今度はその3人を見て驚く。
「シャイナさん⁉千翼さん⁉イユさん⁉」
「こんにちは、響ちゃん♪」
「やぁ響ちゃん♪」
「響ちゃん、こんにちは♪」
響が驚いた人物は、剛が転生してからできた友人である愛川（あいかわ）シャイナと、親友である前嶋（まえじま）　千翼（ちはる）、友人で千翼の彼女である姫島（ひめじま）　朱乃（あけの）であった。
何故、剛と響が知り合いかというと、1年前に遡る。
剛は転生してから、千翼と朱乃の3人で、喫茶店を経営して生活をしていた。
そんなある日、剛は喫茶店で使うコーヒー豆を買いに行った帰り、中学生になりたての響と未来を、無理やり連れて行こうとするナンパ男たちを発見。
その男たちに剛はやめるように言うが、男たちは逆上して襲いかかる。そんな男たちを、剛は足だけで蹴散らして、響と未来を助けた。
助けてくれた剛にお礼を言う響と未来。その時、響のお腹が鳴り、剛が店に連れていってご馳走した。
それ以降、響と未来は剛が経営する喫茶店の常連となって仲良くなったのだ。
「3人もライブに来てたんですね‼」
「まぁな。本人たちに招待されたからな」
「本人？」
「実は、剛とツヴァイウイングの2人は幼馴染みなんだよ」
「えぇぇぇぇぇ⁉そうなんですかぁぁぁぁ⁉」

「まぁな。翼がファースト、奏がセカンドだ」
「へ～」
「そういえば、なんで響ちゃんは暗くなっていたの？」
「実は、未来が来れなくなって」
「な～るほど」
「それじゃあ今日は、未来ちゃんの分まで、私たちと一緒に楽しみましょう♪」
「はい‼」
剛たちと話して、元気になる響。
すると列が動きだし、剛たちは中へと入ると、売店でペンライトを購入し、会場内の席に座る。
しばらくして、会場内の明かりが消え、ステージに明かりが灯る。
そしてステージには既に、衣装に着替えた奏と翼がおり、音楽が流れると同時に歌い始めた。
奏たちが歌い始めると、会場内の観客たちが歓声をあげる。
「アハハハ♪」
「フフ♪」
「いい歌だな？」
「うん!!楽しいね？剛くん♪」
「ああ。相変わらず、心にビシッと伝わってくるぜ」
奏たちの歌を聞きながら、頬笑む剛。
やがて歌が終わり、観客たちからアンコールの声があがる。
「もっと盛り上がっていくぞぉおおお‼」
『『『『オォオオオオオオ‼』』』』
奏は観客たちのアンコールに答え、翼と共に、再び歌い始める。
だがその時
―ドガァァァァァン―
「ッ⁉なんだ⁉」
突如、ステージの一部が爆発した。
そしてそれと同時に、開閉された天井から
大量のノイズが出現した。

「の、ノイズだぁあああああ⁉」
ノイズを視界に捉えた観客たちは、
慌て逃げ惑う。
「の、ノイズ⁉」
「響ちゃんは先に逃げろ‼シャイナ、千翼、
朱乃、避難誘導するぞ‼」
「「ああ（はい）‼」」
響に逃げるよう言った剛は、シャイナと千翼、朱乃の３人を連れ、慌て逃げ惑う観客たちの避難誘導を行う。
「皆さん‼慌てず避難してください‼」
「押さずに‼出口はこちらです‼」
「落ちついて‼慌てず避難してください‼」
冷静に避難誘導していく剛たち。
避難していく人数が減ってきたその時、剛は、まだ響が避難していない事に気がつく。
「響ちゃん‼早く逃げろ‼」
「えっ――きゃあ⁉」
剛の声に気づいた響であったが、足場が崩れ下へと落ちてしまう。
「いたた……はっ‼」
落ちたことで足を怪我してしまった響。その響の前にノイズが迫る。
「響ちゃん‼」
まずいと思った剛は、その場を駆け出す。
だがその時
「うおりゃぁあああああ‼」
『『『＄？・＊§℃＃＠⁉』』』
「なっ⁉」
ガングニールを纏った奏が、【アームドギア】と呼ばれる槍で、響の前まで来ていたノイズを撃退する。
それを見た剛は、驚きを隠せなかった。
「まさか……奏……なのか？」

奏がノイズを倒していることに驚く剛だが、奏に違和感を感じていた。
「どうしたんだあいつ？何か変だぞ」
「くっ‼時限式じゃここまでか‼」
奏は【ＬＩＮＫＥＲ】と呼ばれる、シンフォギアの適合率が基準値に満たない人に投与される適合率を上げる薬の効果が切れてしまい、ガングニールが起動しなくなってしまった。
その時
『？∞？。Ｃ＆＃＠$§』
「くっ⁉」
大型のノイズが、奏に向かって液体を放つ。
それに気づいた奏は、槍を前方で回転させて攻撃を防ぐが、槍に亀裂が入る。
そして
「……えっ？」
「しまった⁉」
「響ちゃん⁉」
槍が砕くてしまい、その破片が奏の後ろにいた響に突き刺さり、大量に出血してしまった。
ノイズの攻撃が止んだのを確認した奏と剛は、響の元に駆けつける。
「響ちゃん‼しっかりしろ‼」
「おい‼しっかりしろ‼目を開けてくれ‼生きることを、諦めるな‼」
響に必死に呼び掛ける剛と奏。
すると、奏たちの呼び掛けに答えたのか、響の瞳がうっすらと開く。
それを見て安心する剛と奏。
そしてその場に、もう1人のシンフォギア装者である翼)が、天羽々斬を纏った状態で駆けつける。
「奏‼大丈夫⁉」
「大丈夫だよ、翼」
奏が無事だと分かり安心する翼。

すると奏は立上がり、ノイズがいる方へと体を向ける。
「いつか……体の中空っぽにして、おもいっきり歌ってみたかったんだよな」
「奏？」
「今日はこんなにも聞いてくれる奴等がいるんだ……あたしも全力で歌うよ」
「奏……まさか絶唱を⁉」
【絶唱】……それは装者への負荷を省みず、シンフォギアの力を限界以上に解放する歌。
だが強力な分、装者への負荷が大きく、最悪の場合体ごと消滅してしまう。
奏が絶唱を歌おうとしていることに気づいた翼は、奏に駆け寄って必死に止める。
「やめて奏‼今のあなたが絶唱を歌ったら死んでしまう‼」
「ノイズを倒せるなら、それでもやるさ……あんた、その子を連れて早く逃げてくれ」
「……死ぬなよ」
剛は響を抱き上げ、出口に向かって走り出す。
出口にいた千翼たちの元に着くと、剛は足を止めた。
「剛？」
「……シャイナ、千翼、朱乃
……響ちゃんを頼んだ」
「……行くんだね？」
「ああ……あいつを死なせる訳にはいかねぇ……大事な奴が目の前で死ぬのは、1度でたくさんだ。それに……避難して、じーっとしてたって、どうにもならねぇからな‼」
「……分かった。死ぬなよ？」
「必ず、帰ってきてください!!」
「当たり前だ‼」
そう言った剛は、響を千翼に預け、奏たちの元に向かう。
再び、剛が奏たちを確認すると。翼が必死で、奏に絶唱を使わせま

いと、説得していた。
「お願いよ奏!!考え直して!!」
「でもこうするしか、他に方法は「お前が死んでまで生きたいなんて、誰も思わねぇよ!!奏!!」えっ？」
　翼の説得を無視して絶唱を歌おうとする奏に、
　剛が止める。
「翼や俺は、お前の命を代償にしてまでこの戦いに勝ちたいなんて、思ってねぇよ」
「剛……なんで……」
「気づいたかって？お前らの話を聞いたからってのもあるが、お前の覚悟を決めた顔が、あいつに似てたからな」
「あいつ？」
「気にすんな……まぁ、ここは俺に任せな」
　そう言った剛は、奏と翼の前に出る。
「お、おい!?」
「いったいなにを!?」
「まぁ見てなって。すげえもの見せてやる」
　そう言った剛は、マッハドライバー炎を腰に装着し、シグナルマッハを手に取った。
「なんだそれ？」
「見てれば分かるよ……チェイス、見守ってくれよ？」
〈シグナルバイク!!〉
「Ｌｅｔ，ｓ変身!!」
〈ライダー!!マッハ!!〉
　剛はマッハドライバーの右パネルを上げ、シグナルマッハを装填しパネルを下げた。
　すると、剛の全身が白を強調した姿へと変わり、右肩に【シグナルコウリン】と呼ばれる物が装着され、剛は【仮面ライダーマッハ】へと変身した。
「な、なんだその姿!?」
「剛!?それは……いったい!?」

「今から名乗ってやるよ。んんッ!!」
「追跡、撲滅、いずれもマッハ!!仮面ライダーマッハ!!」
「仮面ライダー……？」
「マッハ……？」
　剛の名乗りを聞いた奏と翼は、豪快すぎる名乗りに唖然とする。
「さぁて、久々のライダーとしての戦いだ!!どうなっても知らないぞ〜!!」
〈ズーット!!マッハ!!〉
「はっ!!」
　剛はマッハドライバーについている【ブーストイグナイター】を数回押し、加速機能でノイズに接近する。
「なっ!?」
「速い!?」
「らぁああ!!」
『$?・&?・@$$$?・☆∞!?』
　加速機能でノイズに接近した剛に驚く奏と翼。
　そんな剛は、２人を気にせずノイズ蹴り飛ばして破壊する。
「オラオラ!!どんどん行くぜぇええ!!」
『『『『C☆#∞§$@&??!?』』』』
　剛はゼンリンシューターでエネルギー弾を撃ち、続いて打撃で攻撃し、次々とノイズを蹴散らしていく。
　それを見ていた奏と翼はというと
「す、すげぇ!?すげぇよ剛!!」
「あんな動き、見たことない!?」
　剛のノイズを倒していく動きに、２人は感心しながら驚いていた。
「このまま一気に倒すか――――おっと!?」
　一気に倒してしまおうと考える剛であったが、大型ノイズによる攻撃によって妨害される。
「ちっ!!テメエは少し止まってろ!!」
〈シグナルバイク!!シグナルコウカン!!〉

〈トマーレ‼〉
「喰らえ‼」
〈イマスグ！トマーレ‼〉
『@＆＊？％☆＃∞§⁉』
「ノイズを⁉」
「止めた⁉」
【シグナルトマーレ】をマッハドライバーに装填したことにより、シグナルコウリンにＳＴＯＰと書かれた標識が表示される。
　そして剛は、ゼンリンシューターでエネルギー弾を放ったと同時にブーストイグナイターを押し、エネルギー弾に相手の動きを止める能力を与え、当たった大型ノイズの動きが止まる。
「すげぇ……!!」
「なんて強さなの……!?」
「よし‼次はお前らを一掃するぜ‼」
〈シグナルバイク‼シグナルコウカン‼〉
〈カクサーン‼〉
「これでも喰らっとけ‼」
〈タクサーン　カクサーン‼〉
【シグナルカクサーン】の効果で、エネルギー弾が大量に拡散し、小型ノイズに全て命中する。
「よし‼あとはテメエだけだ‼」
〈シグナルバイク‼ライダー‼マッハ‼〉
〈ヒッサツ‼フルスロットル‼マッハ‼〉
「はぁあああああ……はっ‼」
　剛は右パネルを一度上げ、下げると同時にブーストイグナイターを押す。
　すると剛の周りに七色の竜巻が発生し、剛は上空に跳ぶ。
「はあぁぁぁぁ……タァアアアアアアア‼」
『＄＃@§＆％＃？℃☆∞⁉』
　剛は上空で前方宙返りを繰返し勢いを付け、急降下してノイズに跳び蹴りを叩き込む。

叩き込まれたノイズは、悲鳴のような叫びを上げながら炭素化して消えた。
「よし‼全部倒したぜ‼」
「「剛」」
「ん？」
ノイズを全部倒したことを確認した剛の元に、奏が興味津々のような目で駆け寄る。
「なぁなぁ、それいったいなんなんだ？」
「え、えっと……」
「剛‼その姿はなんなんだ⁉」
「そ、それは……」
奏と翼の勢いのある質問にどうしたものかと悩む剛。
だがその時
「ッ⁉ご、剛⁉お前体が光ってるぞ⁉」
「えっ？……なんじゃこりゃあああああ⁉」
剛の体が急に光だし、段々薄れていく。
そして
「どうなってんだぁあああああ⁉」
剛の体は完全に消えてしまい、その場からいなくなってしまった。
それを見ていた奏と翼は唖然とするが、すぐ我に戻り、弦十郎の元に向かった。
ｔｏ　ｂｅ　ｎｅｘｔ　ｓｉｇｎａｌ